

長野県小県郡青木村立青木中学校での 「教科指導法特論 II」実施報告

信州大学人文学部

2007年度、信州大学人文学部は、中学校教員免許取得のために必要な教職科目の一つである「教科指導法特論 II」を、長野県小県郡青木村の全面的な協力の許に、そのプログラムを企画・実施した。本稿は、大学と地域との連携事業の実践例としての報告である。

1. 経緯

本プログラムの企画契機は、青木村教育委員会に勤務する本学部卒業生からの打診にまで遡る。青木村教育委員会は、「学生グループわこうど」という協働事業を行っており、その目的を次のように説明する。

- 学生に村ひとつをオープンにして学びの場を提供する。
- 学生の力によって、村の活性化を図る。
- 共に伸びる「学びの共同体」の構築。

青木村からの打診は、当然この目的に沿ったものと理解されるが、人文学部にとっても、中学校という教育現場が学習の場となることが可能であるならば、実習的学習の大きなチャンスである。そこで、両者の期待に接点が存在することを確認し、人文学部学務委員会が中心となって、本プログラムの計画立案作業に入った。実際に青木中学を訪れて最初の話し合いを持ったのは、2007年5月のことである。

それ以降、人文学部学務委員会と青木村教育委員会・青木中学校との間で様々なやりとりを行ないながら、二泊三日（9月12日～14日）

の短期集中プログラムを完成させることとなった。

なお、これを契機として、人文学部と青木村とで、連携・協定を締結することとなり（7月11日締結）、本プログラムは、その協定内に位置づけられることとなる。

2. プログラム内容

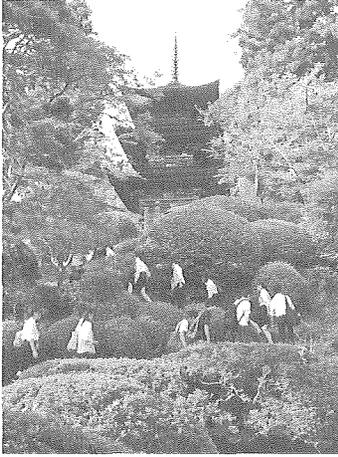
実施プログラムの内容は、授業の参観および部分的な参加をメインに、部活動参加や、文化祭行事などとも連動している、地域での講習会（アイリス・セミナー）などへの中学校生徒たちとの参加、を主体とし、9月12日～14日の二泊三日という短い期間ではあるが、内容的にはかなり濃密なものとなった。各学生が、どの授業にどのように参加するかについては、青木中学校サイドで設計された。

以下、各日に行なわれたプログラムの紹介と、私が実見した様子を、それぞれ簡単に記す。

2.1. 初日（9月12日）

青木村村長の表敬訪問。青木村の歴史的遺産（国宝大宝寺三重塔、「義民」関係遺跡）の実地見学。青木村の教育事業についての説明。夜7時～9時、中学文化祭で実演される「義民太鼓」の練習見学、および体験。

説明によれば、青木村の教育事業の根本は「地域一丸となった教育」にある。このことは、「青木村義民太鼓」の練習風景で先ず感得できた。「青木村義民太鼓」は、江戸時代から明治時代にかけて圧政に対して戦った義民の歴史を、半ば演劇仕立てで演奏する太鼓パフォーマンスである。これは、地域の人々にとって「義民の里」として知られる青木村の歴史の有力な記憶装置の一つとして機能していることは間違いなく、「義民太鼓」の、およそ中学生とは思えないパフォー



マンスに、参加者一同圧倒される。学生たちからは、「私たちも負けられない」という声も出るほどの、学生たちを奮い立たせる衝撃があった。青木村義民太鼓保存会の方が指導に当たっておられるが、ここに地域ぐるみでの教育が垣間見られた。

2.2. 二日目（9月13日）

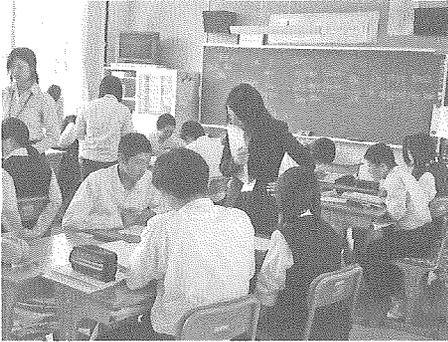
午前・午後、授業見学。部活動参加。夜は、青木村教育委員会・青木村中学校関係者とともに、交流会を行なう。

交流会は、宿泊施設として用いた文化会館に於いて、人文学部学生が中心となって準備を行い、夕食を共にしながら、青木村の教育方針についてや、授業見学での感想や質問など、現場の先生方と積極的に意見交流を行っていた。

2.3. 三日目（9月14日）

午前中授業見学。午後は、講習会（アイリス・セミナー）に生徒たちとともに参加。反省会。18時30分ころ青木村を立つ。

あくまでも、授業見学が主ではあるが、授業によっては、TA 的に参加したり、急遽、自習クラスを任される学生もあった。実見したク



ラスでは、生徒たちともうまく関わって、なかなかうまく対応していた。反省会の内容については、後に記す。

3. 経費など

参加学生総勢18名であったが、学生の経費負担は、食事代（昼は給食）のみであり、交通費（送迎バス）、宿泊費、入浴費（温泉）については、全て青木村の全面的な支援によって、無料にしていた。これは、我々だけが特別というわけ



ではなく、上述の「学生グループわこうど」事業において、実現しているとのことである。

4. 成果および問題点

最終日の最後に行なった反省会で、参加学生からは、現場の先生方・中学生・そして地域住民からも、大いに刺激を受けた旨の発言が相次いだ。教員を目指す学生たちにとって、地域での教育を考える意味でも、一定の成果があったと判断される。

引率する教員の立場からすれば、学生たちが中学校の教育現場で多くのことを学びとって欲しいと願うと同時に、現場で行なわれている中学教育プログラムを乱すことになりはしないか、というのが大きな

心配・懸念であった。事実、現場の中学教員からの問題指摘も直接的・間接的に得ており、学生指導上、今後の課題とすべき問題もある。これは、参加学生の意識のばらつきに起因するところがあるように思われる。今回の参加学生は、二年生～四年生であり、換言すれば、教職志向に対するリアリティの程度差が様々な態度に反映したと見られる部分もあり、今後の授業参加条件や、我々の事前指導の方法について再考すべきものである。

また、「教育実習」との差別化の問題もあるが、現場の中学の先生方に対して、どこまでのことをお願いするかが必ずしも明確でなかったため、現場の先生方もやりにくかったと思われる。今年度は、とにかく最初の試みであり、来年度以降の課題としたい。

しかし、総合的に判断して、本プログラムは成功であったと言ってよいと思う。最終日には、少なからぬ中学生諸君が、松本に帰る学生たちに対して惜しめない声を掛け続けてくれた。教職を目指す学生たちにとって、大きな励みになったことであろう。

5. 地域価値としての「教育」

最後に、青木村の「教育」について、本誌のタイトルでもある「地域ブランド」を「地域価値」と読み替えて、その点から若干のコメントをしたい。

「地域連携」という点から考えると、大学と地域とは相互に等しくメリットのある連携関係で、また双方が大きな負担を抱え込まないようではなくては、長期的な連携関係を維持するのは難しい。正直なところ、今回の青木村からの申し出は、我々にとっては、キャンパス外での「学生教育の場」の獲得、という大きな意味を有するが、果たして青木村にとってどのようなメリットがあるのか、当初はなはだ疑問であった。

しかし、青木村サイドの説明は、村の活性化を、長期的なビジョンで考えており、その核として「教育」を考えている、とのことであった。また事後に行なわれた連絡協議会の席上では、加えて中学教育自体のブラッシュアップという効果も考えているようであった。それは、青木村が、優れた人材を生み得る村として、また、優れた人材を迎え得る村として、末永く存続することを狙いとしているからに他ならないからであろう。青木村は「村」といっても、孤立した地理的環境にあるわけではなく、上田市のベッドタウンとしても機能する、恵まれた地理的環境にもある。「平成の大合併」は多くの村を消し去ったが、青木村はむしろ小回りの効くコンパクトな村として動いている。その上で、地域価値を高めるのは「人」に他ならない、という全く派手さのない、しかし王道的な行き方をとる青木村の方法は、競争原理に基づいて「地域価値」を前景化することだけが地域ブランドではない、と語っているようだ。

(文責：人文学部学務委員長 山田健三)

【謝辞】

「教科指導法特論Ⅱ」では、青木村教育委員会、青木村中学校をはじめとする、多くの関係者の方々・また地域住民の方々にも、お世話になった。記して謝意を表したい。